

MY HOME TOWN MIHARU MY HOME TOWN MIHARU MY HOME TOWN MIHARU

三春わが街

MY HOME TOWN MIHARU MY HOME TOWN MIHARU MY HOME TOWN MIHARU

■コミュニティだより

VOL. 87 (年4回発行)

■発行日 平成30年 3月31日
■発行 三春まちづくり協会
■編集 三春まちづくり協会広報部会
三春町大字貝山字泉沢100-1 (旧若駒寮)
TEL/FAX (62) 3988



『出前懇談会の開催』 — 愛姫生誕四五〇年と 三春の女性たち —

去る二月七日、まほら学習室において出前懇談会を開催いたしました。今回は、歴史民俗資料館主任主査(学芸員)でいらつしやいます藤井典子さんを講師にお招きし「愛姫生誕四五〇年と三春の女性たち」というテーマで愛姫をめぐる女性三代についてお話をいただきました。

三春田村家に生まれ、十二歳で伊達政宗の正室として嫁いだ愛姫がどのような人物だったのか、祖母母親、愛姫の三代の関係はどうだったのか等、資料も少なく、わからないことも多いのですが愛姫をめぐる女性たちの姿を見ることで、戦乱の時代に生きてきた、三春の女性の力強さについてお話をいただきました。

【藤井典子さんが要旨をまとめた資料によりお話しされた内容の一部を掲載いたします。】

一、母と祖母の確執

愛姫は天正七年冬、米沢にいた伊達政宗のもとへ嫁いでいる。この頃、田村清頭は葦名・石川・二階堂・白川・岩城などと敵対し、周囲から孤立するような状況であった。その状況下での救いは相馬や伊達との友好関係である。愛姫を嫁がせることにより、清頭は伊達とのさらなる友好関係を結ぶことを決定付けた。このことは、伊達から嫁いでいる祖母(小宰相と手紙では名乗っている)と相馬から嫁いだ母(後年仙台城の北に住まいしたことにより

於北あるいは於喜多と呼ばれる)の関係にも影響を与えたと思われる。さらに、久保姫のようにすぐに男子の誕生を見ないまま、清頭は天正十四年十月に頓死する。小宰相と於北の確執は小宰相が政宗に送った手紙に記されていて、「小宰相消息」(仙台市博物館所蔵)には、次のような一節があります。要約しますと「さらにさらに申し上げま

す、あの方と、あの方親子は、いったいどんな宿命のかたきだというのでしょうか、清頭は命までとられました、その上なんの不足があるのでしょうか、位牌まで削ったんですよ、ひとえに情けなく思うことです。清頭のかたきは、あの方と決めておりますよ。(中略)戦を終わらせなすつたら、こちらへお立ち寄りになられて、田村家中の置きもなさなければと漏れ承つて、とつても嬉しく思います。けれどもあの方、手ごわい方であらうしやいますからね、少々のお仕置きでは効き目が無いと思うけど、そなた(政宗)が清頭の筋目を正そうとして、大崎方面のいざこざもお捨て置かれなつて、ご自身で出馬されていらつしやつたので、

あのお方(於北)と義胤は談合をなさつて、三春城をも守替なされようと思われたようです。それで、もはや揚土門まで討ち入られましかげをもって、なんと不思議に押し返してしまいました。「というふうには手紙で甥の政宗に伝えていきます。

二、三春の女城主

愛姫の祖母である隆頭後室(小宰相)が悔しい思いをしたのは、清頭が死んだからだけではない。天正十六年閏五月十二日、愛姫の母親である清頭後室(於北)の甥にあたる相馬義胤が、三春城乗っ取りを企て、揚土門まで討ち入られるという事態もあつたのである。

この当時、清頭を失つた三春城の事実上の城主は、愛姫の母である清頭後室であつた。伊達治家記録中にも清頭後室が政宗に対して使者を遣わしている様子がかがえる。この時点で清頭後室が、伊達党と相馬党とに二分されていた田村家中を、相馬方へと舵を切ろうとしていたのは、相馬義胤の三春城乗っ取りに手を貸していた様子などからうかがい知れるだろう。郡山合戦の後三春城に入った伊達政宗は、畢竟、このよう

なことが起きたのは相馬を一家とする清頭後室がいたからだとする田村月斎らの意見により、彼女を船引城へ隠居させることを決めている。史実ではないにせよ、「奥羽永慶軍記」では、三春城乗っ取りに際して、相

馬方の劣勢が確実なつたときの清頭後室の様子を伝えられている。

三、かくも長き戦い

愛姫の母である清頭後室は、こうして船引城へ隠棲する事となつたが、田村家はその後、名代を田村孫七郎宗頭(清頭の甥)とするも、秀吉の奥州仕置により改易となる。これにより、清頭後室も船引城に残ることができなくなり、相馬堤谷(現南相馬市原町区堤谷字根田の田村館)に移り住む。この母のことを後年、政宗は仙台城へ引き取つてゐる。伊達とも敵対した相馬家の出の者として、清頭後室は何を思つていたか内容こそ伝わらないものの、伊達治家記録には、政宗に招かれて語らつたらしい短い記録が残されている。当時、この母を誰よりも心配していただであらう愛姫は、引き取つたとはいへ、江戸屋敷にいたため、再会もできないうままであつた。

更に、清頭亡き後、名代として三春を治めることとなつた宗頭は、天正十八年、田村家改易の撤回を訴えに京都に上り、その途次死去したとする説がある。片倉家に伝わる田村系図では、宗頭は改易後、牛縷を称し、名前の(政宗から拝領した)宗の字を定に改めて「牛縷定頭」と名乗り、奥州伊具郡金山村に潜んでいた、とされる。さらに、寛永の末、愛姫の命を受けて白石城主である片倉小十郎重長が自分のもとに招き、白石の勝

坂というところに住まわせたという(白石には宗頭・清頭の墓がある)。

愛姫にとつて、一番の願いであつた、田村家の跡継ぎを、という命題はこうして田村家を再興するという形に姿を変えていく。自身の長男であり仙台藩主となつた伊達忠宗の三男、宗良に遺言によつて田村家を継がせることになり、承応二年、愛姫の死後、その願いは叶えられた(宗良は岩沼藩主二代目建頭から一関藩へ)。政宗との間に三男一女をもうけながら、長女の五郎八姫、長男で仙台藩主の伊達忠宗だけが成人し、次男、三男が夭折したため、愛姫は孫の代まで待つたのである。

「色よき花の枝をこそみるくめでたく、めでたく」とは、「陽徳院夢想之書付」と呼ばれる一紙の内容であるが、宗良が入胎したことを夢知らせで知つた彼女が書いたものだといふわけである。この中に重ねて書き付けられる「めでたい」の文字が、長年心に秘めてきたものが叶う心の内をよく表していると思われる。彼女が嫁いでから実に七〇年もの時間が経過していった。



(裏面へ続く)

講演後、会場からの質問にお答えして頂きました。質問と回答は以下の通りです。

○贈答外交(外交官的役割)で政宗に京都の情勢を知らせていたという話が興味深かったのですが、それで失敗するようなことがなかったのでしょうか。

◎これって例えはありませんが失敗は結構あったみたいですね。結局日本では昔から誰かを間に入れて、打診して、贈り物などで裏の方から手を回すという事が結構多いと思うのですが、昔は男性が直接行ってしまふと失敗した時に、取り返しがつかなくなってしまうので先に、奥様方がお互いに使いをやり取りして先方の希望するような物を送ったりするような事をやっていたんです。浅野内匠頭と吉良上野介の例は、その辺の根回しが上手くいっていなかったからと言う話でもない訳でもありません。愛姫のお母さんである於北さんも、政宗の処にお酒とか食べ物をお届けしたりしています。敵対していたのですが、致命的な争いにならないように後ろの方でいろいろやっていたようです。

○それは政宗の指示じゃなくて、愛姫自身の判断で動いていたのでしょうか。

◎聚楽第に入るといふ事は人質になるわけで、動きひとつで何時処刑されるかわかりません。豊臣秀次は、奥さんや子供たち全員処刑されましたが、何時そのような事になったもおかしくありませんでした。愛姫の場合は、政宗が秀次に非常に近かったという事もあってもしかすると、最上義光

の娘の駒姫みたいに処刑されていてもおかしくなかったのですが、政宗と愛姫は何か免れていました。それはもしかすると、北の政所とかの力が働いていたのかもしれないと、話をすると方もいらつしやいます。ただそれは、裏付けが何も残っていないので確かな話ではありません。

○先ほどのお話で七草木の「地頭の娘」の話がありました。この方はどういった方だったのでしょうか。

◎普通は親の官職を継ぐのは、日本では非常に難しいこととお父さんが地頭だから娘も地頭になれるという訳ではないのですが、七草木の地頭の娘さんは、お父さんの代わりに鎌倉幕府に馳せ参じて「着到状」を出しているんです。詳しくは分からないのですが、女性はその当時に地頭として七草木を支配していたという事が分かる訳です。その方は相馬の方と結婚している事は分かっています。しかしそれ以上詳しいことは分かっていませんが女性でも活躍した人がいたんだという事が分かるかと思えます。三春には、古い時代から伝わっている資料が非常に少なく、想像するしかないんです。三春の町名の由来も、三つの春だから三春じゃなくて、もともと何故三春なのかって合理的に説明のつくものもなくて、ただ「御春の輩」(みはるのともがら)と書いてある古文書が残っているんです。そのころから「御春」って書いていたという事は分かっているのですが、なぜ「三春」になったかは分かっていません。

福祉部会 視察研修

小山美智子さん

二月二十二日(冬晴れ!)今年度の介護施設研修先は郡山市緑が丘の「ハーモニードリケ丘」です。参加者は七名。部会ではここ数年にわたり、三春町内数ヶ所の介護施設に伺って研修をさせて頂きました。企画の趣旨は、会員が各々の地域で、介護に携る方達と施設とのパイプ役になれば良いとの思いからです。今回郡山市の施設に決めたのは、部会員の身内が「ハーモニード」に入所していた体験からの提案でした。

この施設は東部ニュータウンにあり、広大な敷地に全て平屋建ての施設群が四ブロックに分けられています。まるで一つの町のようです。施設から西の方に奥羽山脈や那須連山が望めるロケーションに、見学者は皆歓声をあげるほどでした。内容は、郡山市民でなくても利用できる「特別養護老人ホーム」「ショートステイ」「デイサービス」等々郡山市民のみが利用できる「地域密着型特別養護老人ホーム」「ショートステイ」「グループホーム」等々各種の利用方法や料金は、三春町内の施設と同様に個別の相談が必要です。



施設長やケアマネージャーによる丁寧な説明があり、

広い施設内のご案内を頂きました。現在百七十八名の利用者があり大忙しの現場です。見学者の沢山の質問に対して、真剣に納得ゆくまでお話しくださいました。私達も、高齢の親・親戚・伴侶の事を考えて、質問も本気!なのです。施設内には一丁目から七丁目まで番地も付いた住所があり、各部屋には表札があるので、「〇丁目〇番地 氏名」の表札には尊敬を感じましたし、心住み慣れた地域の住人という感じがして良かったです。施設の中で見つけたことばで「あなたの手になれば」に感激しました。三春の町でも、若い人達や健康者は、高齢者・障害者・要介護者の方達の優しい手になりました!

街並部会視察研修

渡辺勝雄さん

高萩・北茨城方面を視察研修した。最初に訪れた穂積家住宅は、江戸時代からの豪農(庄屋)屋敷、で入口に二階建ての長屋門と前蔵があった。母屋の屋根に特徴があり、「五段茅葺中竹節揃角市松模様寄棟造」と呼ばれるつくりであった。軒付けは五段重ねで葺かれており、その下に節を白く塗った竹を揃えて葺かれていた。また、角は五段重ねを利用して市松模様になっており、趣があった。次に「お屋敷通り」に行った。現在でもその旧状を残している侍屋敷で大手通りに面して茅葺寄棟造りの武家長屋門が二棟並んでいた。昼食後、野口雨情の生家

を見学して五浦へ向かった。ごつごつとした岩がそびえる五浦の崖の上に赤い小さな六角堂があった。この建物は、杜甫の草堂(六角亭子)・朱塗の外壁、屋根の上の宝珠は仏像・床の間と炬口は茶室の三つの意図が込められていると言われている。東日本大震災時の津波で流失したが、創建当初の姿で再建されていた。



城下町・三春中心街散策路の紹介 ⑦

東館散策路

元 地域部会長 鈴木 武

田村大元神社参道を通り殉難碑の前からほぼ尾根伝いに散策路が設けられている。田村大元神社の入り口には橋が架かっていますが、今は橋の下には川はありません。明治時代に桜川は道を挟んだ反対側に変えられました。階段を上っていくと表門が現れます。迎えてくれるのは、金剛力士像です。明治元(1868)年の神仏分離令によって、真照寺に移されましたが、昭和36(1961)年に田村大元神社に戻されました。表門を入ると、正面に大元神社の拜殿が、右に八幡神社、左には熊野神社がみえます。右奥へ進むと東館散策路で歩いて行くと、三春城の三の丸跡に行くことができます。木立に遮られて全体の地形はわかりにくいですが、空堀を超えるあたりから小さな郭が幾つか目に入ります。西斜面には3本の堅堀があり、本丸跡に達すると、正面には本城の揚土門郭、その上部に本丸の急崖が広がります。東館本丸中央に井戸跡があります。ここは戦国期に田村隆顕後室伊達氏小宰相の住居で、天正16年郡山合戦ののち、伊達正宗がしばしば訪れています。東館と本城との狭間にはかつて喰い違いが設けられていて、本城帯廊の通路を扼(やく)していました。天正16年5月三春城を取損じた相馬義胤はここを突破して虎口から逃れたといわれています。本城との狭間から東へ、左上へ登れば町民の森へ通じ、下れば入清水へ出ます。詳しく知りたい方は町の歴史民俗資料館の学芸員にお聴きください親切丁寧に詳しく教えてくれます。



編集後記

この冬は、厳しい寒さが続きましたが、そろそろ今年の桜の開花はいつ頃かな?花色はきれいに咲くかな?と気になる季節になってきました。▼異常気象のせいなのか、咲き始めた頃に雪が降った年もありましたが、そればかりでなく年々開花が早まってきているような気がします。桜の花が咲きはじめると三春の町も、いつきに都会並みの人、人、人と観光客が増えて、三春町が一番華やぐ季節になります。▼最近では「おもてなし」のお茶のサービスをしてくれたり、観光ボランティアをしてくれる地域が増えてきました。今年には陽徳院愛姫生誕四五〇年になりますが、その当時の女性で名前が残っているというのは珍しく、いかに愛姫が聡明でかつ高潔だったとかいう事を見習って、心のこもった「おもてなし」ができたならいいですね。▼三春の町では、記念事業として町商工会、観光ボランティア、各種団体の方々によるいろいろな催し物を用意している事でしょう。町の発想がより良い発展につながってほしいですね。(渡邊和江)

コミュニティだより 「三春わが街」第八十七号 発行日 平成三十年三月三十一日 発行 三春まちづくり協会 編集 三春まちづくり協会 広報部 会 三春町字真山泉沢二〇一 (六二) 三九八八